

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月3日(金)

《靈的出産の喜び》

今日の福音(ヨハネ 16・20-23a)のように、私達は人生を仕方なくさまざまな苦痛、痛みを体験しながら生きています。実際に生まれてから今まで、ひと箇所も痛さを感じない時があったかと考えてみますと、体も心も必ずどこかが不便になっています。100パーセント私は痛みがない。全く痛みがなく平安な心だと言えるくらいの時期は、私達の人生、仮に100年とした場合どの位あるのでしょうか。むしろ無いのではないですか。いつか面白い例えとして申し上げたと思いますが、皆様「水虫」位は持っているのではないですか。(大笑い)

とにかく、体のどこかに不便なところがあると思います。生まれてから死ぬ時までそれが繰り返されて、もっと段々その痛みから乗り越えられる力が貰えるのではないのでしょうか。

今日イエス様が、二つのことをおっしゃっていると思いますので、一緒に考えてみましょう。一つは、子供の時、歩き始めたころから私は親から「男の子は痛い、痛い」と泣き言を言ってはいけぬ。」と言われて育ちました。それで「痛い」と言ってはいけぬ」と思って来ました。その癖が、大人になって体の具合が悪くて病院に行っても出てしまい、お医者さんが体を触って「どうですか痛いですか」と聞かれても、その時どの位痛ければ「痛い」と言ったらよいのか迷ってしまいました。ちょっと触っただけでも「痛い、痛い」と叫ぶ人もいるし「これは大変だ」と思われるくらいでも「痛くありません」と言う人もおります。大人の男としてお医者さんに痛いですかと問われても「ええ、痛いのです」と今でも答えられないのです。ですから、実際私は聞きました。「どこまでが痛いと言えればいいですか」と。皆様はどう思われますか。

私達が考えなければならないことは、ある人は小さな傷でも痛みを感じます。ある人は大きな傷でも平気な顔をしています。その時そんな小さなことで「痛い、痛い」と言うのはおかしいのではないかと責める必要は絶対ありません。いえ、責めてはいけません。なぜならその小さな傷で痛んでいる人はそれでいっぱいなのです。ですから「痛い、痛い」と言う人の、その相手の立場に立たなければなりません。そういうことを一つ意識するべきだと思います。

さあ二番目は、やはり私達は様々な苦しみを体験しながら成長します。それが人生かも知れません。しかし、今日の福音でおっしゃった例えとして、女の人が子供を産む前には、色々な悩みとか肉体的な痛みを感じます。しかし、出産後にはその痛みとか苦しみを「思い出さない」と言っています。「出せない」ではなく「出さない」と書いてあります。これはどういうことでしょうか。新しい命が生まれたことで、その喜びによって今までに持っていた悩みごと、不安とかが全部無くなるのではなくあってもそれを思い出さない。それによって影響を受けない。喜びがもっと大きいという話です。肉体的な痛みも同じような結果を出すかも知れませんが、私達にとっては靈的な出産が必要ではないかと私

は思います。

私達は長年信仰の生活をして来ました。もちろん新しく信仰の道を歩き始めた方もいらっしゃるのですが、靈的な喜び、喜びの条件は苦しみにあります。どんな苦しみかと言えば靈的な苦しみです。靈的な苦しみとはどういうことでしょうか。色々あります。神様に対する疑いとか、人を傷付けた色々な痛みとか、人を憎んで貰う痛みとか、いっぱいあります。それに縛られてしまうことです。結局それを一言で言うならば罪です。色々なことで縛られてしまい、そこから解放されなくて暗闇に陥った感じ。どうすればいいでしょうか。

ある意味で、その罪の痛みさえ、私達には靈的な出産の喜びのために必要かもしれません。わざわざ罪の痛みを感じようとする必要はありません。なぜなら罪の痛みを私達は感じるはずですから。逃げようとしても罪の中で色々な経験をします。大事なことは罪の経験をした時に、そこで止まるか、これはいけない、この痛みは私には有り得ない。耐えられないという強い葛藤、希望によって闇から解放されようとするかです。そしてその時に与えられる喜びが、靈的な出産の喜びではないかと思えます。

皆様、今、体の調子が悪くて色々な心配のある方が結構いらっしゃると思います。しかし、その体の痛みによって心が崩れてしまう。そうなってしまうとこれは大変です。何事があっても私は乗り越えられる。神様が支えて下さると信じましょう。健康な人も健康ではない人もやはり体には限りがあります。しかし、そこに痛みの基準を置かないという強い心、信じる心が必要ではないかと思えます。

ありがとうございました。